

<実践報告>

# 学生の主体性を引き出すボランティア活動支援制度の 変遷と課題

## ー 青山学院大学ボランティア・社会貢献プロジェクト・ サポート制度の実践報告からー

島崎 由宇<sup>1</sup>・三神 憲一<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 東海大学 健康学部 健康マネジメント学科

<sup>2</sup> 青山学院大学 シビックエンゲージメントセンター

Changes and Challenges in the Volunteer Activity Support System that Encourage  
Students' Independence:  
Aoyama Gakuin University Volunteer and Social Contribution Project Support System  
in Practice

SHIMAZAKI Yu<sup>1</sup> MIKAMI Kenichi<sup>2</sup>

<sup>1</sup> Department of Health Management, School of Health Study, Tokai University

<sup>2</sup> Civic Engagement Center, Aoyama Gakuin University

キーワード：ボランティア助成制度、ボランティア、社会貢献、実践報告

### 1 はじめに

青山学院大学シビックエンゲージメントセンター（以下、「CEC」とする）では、センターが掲げるミッション<sup>(1)</sup>のもと、青山学院大学の学生・教職員が主体となって実施するボランティア活動ならびに社会貢献活動を支援する助成制度の一つ<sup>(2)</sup>として、ボランティア・社会貢献プロジェクト・サポート制度（通称ボラサポ 以下、「ボラサポ」とする）を実施している。2023年度で7年目を迎えるボラサポは、これまで多種多様なプロジェクトを採択し、青山学院大学の学生・教職員が活動を実施してきた。学生に対するボランティア活動ならびに社会貢献活動への助成制度は、全国の大学で運用されているが、制度を活用した個々の活動報告はあれ、制度それ自体の実践を振り返った報告は少ない。また、本学においてもボラサポ採択団体の活動報告は活動報告書や CEC Web サイト内で掲載しているものの、年度毎の採択プロジェクトの採択結果と概要紹介に留まり、制度そのものを整理した実践報告はされていない。そこで、本稿ではボラサポの制度概要とこれまでの制度運用の流れと変化を整理し、特徴的な採択プロジェクトの報告からその実績と成果をまとめ、制度の課題を考察したうえで、今後の制度運用における見通しを述べる。

### 2 大学ボランティアセンターにおけるボランティア支援と資金援助制度について

まず、大学ボランティアセンター<sup>(3)</sup>が実施する支援事業について整理する。東京ボランティア・市民活動センターが2021年に全国の大学等1117校を対象に実施した「大学ボランティアに関する全国実態調査報告書」（2021.7）によれば、全国の大学のうち約8割の大学で学生のボランティア活動支援が行われており<sup>(4)</sup>、それら活動支援部署が実施する13項目の支援事業<sup>(5)</sup>のうち、約6割で実施されている事業は「情報収集提供活動」60.2%、「アドバイザリー活動」66.9%、「マッチング活動」46.8%である。資金援助制度に着目すると、項目は「資源提供活動<sup>(6)</sup>」に含まれ、その割合は39.7%であり、資金援助活動にあたる「学内助成金」は15.3%、「学外助成金情報」の割合は15.6%の実施率である。このように、学生がボランティア活動を行うための情報提供やアドバイザリー活動は全国で広く行われている一

方で、資金提供など学生の活動を物質的に援助する支援は決して多くはない。

次に、大学生のボランティアの参加状況や参加動機についても触れたい。国立青少年教育推進機構(2020)が行った調査では、ボランティア活動・社会貢献活動へ参加したことがある大学生(n=2176)は37.5%である。また、活動参加経験者の参加動機で最も高いのは「自分の成長につながると思ったから」(45.4%)、ついで「さまざまな人と関わりたかったから」(28.5%)であり、自己実現のためや人間的自立といった利己的な動機でボランティアを始める学生が多くいることがうかがえる。また、公益財団法人日本財団ボランティアセンター(通称 Gakuvo 旧: 日本財団学生ボランティアセンター)が2017年に大学生1万人を対象に行ったアンケート調査がある。「ボランティア活動をはじめた最大のきっかけ」の項目では、「団体や知人との関係性」30.4%、「自己実現・自分自身のため」27.5%、「その団体への共感」21.1%、「社会貢献の意識」8.2%であり、こちらは大学生のボランティア活動の動機として、利他的な動機が割合として高く出ている。そのうえで、大学生のボランティア活動に対する支援のニーズに着目すると、前述の国立青少年教育振興機構の調査では、「大学生のボランティア活動のために求められる支援」の質問項目のうち、「ボランティア活動のための資金の援助」は、「とても重要だと思う」(29.7%)「少し重要」(44.2%)と合わせて7割を超える。資金援助が特に必要とされる活動には、災害・復興支援、地方創生など国内での遠隔地による現地活動や、国際協力・支援における海外渡航を伴う活動が大部分であり、現地までの交通費や宿泊費の金銭的負担は大学生には大きく、大学ボランティアセンターにおける学内外の資金援助に関連した支援の必要性が言えよう。

また、本学においては、CECが2019年度から実施している「ボランティア活動に関するアンケート」の調査結果において、9割の学生が「ボランティアに興味あり」と回答しているものの、過去1年間の活動経験については3割に留まっており、関心はあるものの実際の活動には繋がっていない学生が多くいることが分かる。加えて、過去1年間のボランティア活動経験はないが、「機会があれば参加したい」という潜在的関心層のボランティア活動分野においては、2019年度～2022年度のいずれにおいてもトップは「国際協力・交流」であり、活動に参加するために大学側に求めるサポートとして、「アサイン・マッチング」「共に活動するネットワークづくり」といった制度・サービス面の他、「情報」「活動場所」「活動資金補助」といった物質的援助のニーズが多く見受けられている。

### 3 ボラサポの制度概要

CECでは、2017年度から学生・教職員のボランティア活動の促進と可視化を目的にボラサポを実施してきた。制度の対象は、青山学院大学の学生・教職員が主体となって実施するボランティア活動ならびに社会貢献活動であり、学生のみならず教職員も対象としている。企画が認められ、採択を受けることで、CECから経費支援や活動のサポートを受けることができる。

ボラサポには目的に沿った制度運用によるプロジェクト支援を行うため、「スタートアップコース」と「ステップアップコース」の2つに分かれたコース設計を2019年より行っている。以下に2023年度時点での各コースの特徴と両コース共通した制度としての特徴を述べる。(表1)

#### (1) スタートアップコースの特徴

##### a. コーディネーターの伴走

スタートアップコースは、学生・教職員が取り組むボランティア活動や社会貢献活動の立ち上げ・基盤形成のフェーズにあるプロジェクトを主な対象としている。コースとしての大きな特徴の一つとして、その企画の中身作りから実施段階までをCECコーディネーターが伴走を行うことにある。1つのプロジェクトに対して一人のコーディネーターが伴走を担当し、プロジェクト開始から活動実施、報告書の作成・提出までのサポートを行う。学生・教職員の想い描くプロジェクトに対して、その現状課題や取り組み内容を整理し、情報提供や環境整備を行い、当初想い描いていたプロジェクトをより具体化し実現に向けた企画とし、報告書の作成まで伴走することで、活動の振り返りや今後の展開を明確化し、さらなる発展へつなげていく。

##### b. 申請期間

2023年度より、スタートアップコースの申請期間は年度初頭(4月)から年度内(1月末迄)であればいつでも申請することができる。申請期間を特定の短い期間に定めないことにより、学生が正課授業

のなかで社会課題に関心を深め、その課題に対して「こんなことがやりたい！」と思い立ったタイミングで申請へと結びつけることができる。CECに訪れる学生のなかには、部活動やサークルの活動、外部団体等での経験やスキルを基に地域に貢献できることに取り組みたいといった類の相談も多く、そうした相談に対して、スタートアップコースを活用し採択を受ければ、CECによるサポートのもと取り組めることも案内できることで、学生がプロジェクトを計画するうえでのモチベーションにつなげる狙いがある。

#### c. 補助金額とサポート内容

補助金額の上限は5万円の設定としている。サポート内容としては、CECコーディネーターがプロジェクトに伴走する形で企画への助言や、学内施設の事務手配補助のほか、CECが管理するZoomアカウントや機材の貸出も受けることができる。補助金額は決して大きな額ではないが、スタートアップコースの場合、多くは資金補助の側面よりも、実施までの助言や事務的なサポートに求められることが多く、限られた予算のなかで取り組めるプロジェクトを検討していくことや、足りない予算をどのように工面するかも含めて、プロジェクト立ち上げの課題としてサポートを行っていく。

#### d. 審査

企画書と予算書を含めた申請書類による書類審査と、CECコーディネーターによる面談の結果をもとに採択が審議される<sup>(7)</sup>。企画書は、プロジェクトを企画することに至った背景・動機と、プロジェクトの達成目標が大枠にあり、それらをもとに現状の課題分析と、課題に対する活動内容、プロジェクトの終了後に期待する変化、成果指標、今後の展開を順に記載することで、プロジェクトの概要が一つの表として俯瞰できる書式となっている。これらを書き込んでいくこと自体がプロジェクトの整理につながり、活動を具体化させていく作業となっている。

### (2) ステップアップコースの特徴

ステップアップコースは、スタートアップコースと比較して、すでに取組みを継続してきた活動や活動基盤が整っているプロジェクトを対象としている。幅を広げた経費支援や活動サポートを行うことで、既存の活動をよりダイナミックな取組みや挑戦の機会として、発展につながることを目的としている。

#### a. 補助金額

補助金額の上限は30万円であり、交通費に限っては半額補助の設定である。交通費半額に関しては、遠隔地での活動は人数や場所によっては交通費だけで上限を超えてしまうことも多いが、予算が交通費に全て充てられるのではなく、活動費全般に活用してもらうことを狙いとしている。

#### b. 審査

書類審査とプレゼンテーションによる二つの審査を行い、複数の審査員による審議によって採択を決める<sup>(8)</sup>。書類審査は、実施計画の具体性や活動内容の妥当性などをもとに評価し、活動の実現性や実施まで自立した取組みが可能であるかが評価のポイントとなる。プレゼンテーション審査は2023年度から導入し、申請書の企画内容だけでは汲み取れないプロジェクトに対する想いを審査基準にも含める目的や、書類上では読み取れない活動に対する想いや懸念事項等詳細を確認する場としての意味がある。

### (3) 両制度共通の特徴

両制度に共通する特徴として、ボラサポが決して資金援助のみを目的とした制度ではなく、教育的側面が込められている点にある。

まず、申請書の作成に取り組むこと自体が、漠然と頭の中で描くプロジェクトのイメージを言語化し具体化する作業であり、プロジェクトマネジメントの視点や能力を養う狙いがある。申請書は活動を整理するためのサポート機能を果たすツールとしての意味があり、設定された項目を埋めていくことで、プロジェクト目標の明確化、課題や背景の整理、解決のために行う活動と、その評価指標の設定、今後の展開の想定を行う。書面上での審査が中心となる以上、第三者に分かりやすく伝える工夫を凝らし、プロジェクトの可視化に挑戦することを狙いとしている。

ボラサポの審査項目は、書類審査が「活動ニーズ」「活動動機」「実施計画」「受益者・連携団体」「自身の成長」の6項目で両コース共通であり、ステップコースに限っては、書類審査に加えて、プレゼン審査による「意欲」「構成」「明確性」の3項目があり、これら項目に対して採点を行い評価し審査、採択を決定する<sup>(9)</sup>。

また、ボラサポでは採択回数の上限を定めている。スタートアップコースであれば一度きり、ステップアップコースであれば連続採択は2回までの条件である。これは、将来的に、採択されたプロジェクトがボラサポによる助成に依存せずに活動を継続し、自立した活動への成長を期待しており、ボラサポはそのための一歩として活用してもらうことを想定している。そのため、採択プロジェクトには活動の自立・発展に繋げるための具体的計画を持ち、その計画の実施に必要なかつ使用目的が明確な資金の申請であることや、ボラサポの支援に依存しない運営が可能な資金計画があることも重要といえる。ボラサポがあくまでも団体への支援を目的としたものではなく、プロジェクトを対象とした制度としての特徴であり、申請条件には団体の設立維持・継続や備品購入が主目的ではないことは、その要項にも明記されている。

表1：2023年度ボラサポ制度コースの概要

| スタートアップコース |                                                                                 | ステップアップコース |                                         |
|------------|---------------------------------------------------------------------------------|------------|-----------------------------------------|
| 趣旨         | プロジェクトの新規立ち上げ、基盤強化。<br>企画の中身作りや実施段階までコーディネーターのサポートを受けて進めていく。                    | 趣旨         | 社会課題に対してそれまでの活動の幅を広げた挑戦的・発展的なプロジェクトの支援。 |
| 申請期間       | 2023年4月1日～2024年1月31日までの期間、いつでも申請可。                                              | 申請期間       | 2023年5月29日(月)～6月2日(金) 18:00 まで          |
| 審査         | 書類審査・面談                                                                         | 審査         | 書類審査・プレゼンテーション審査                        |
| 助成内容       | 活動費補助<br>1件辺りの上限5万円                                                             | 助成内容       | 活動費補助(交通費のみ半額補助)<br>1件当たりの助成上限30万円      |
| 活動サポート     | ・プロジェクトの企画・準備・実施・広報など<br>・CEC コーディネーターの助言や学内事務手続き等の協力<br>・Zoom プロアカウント、センター備品貸出 | 活動サポート     | ・Zoom プロアカウントの貸出<br>・学内の 広報や会場手配等       |
| 条件         | 採択は1度きり。                                                                        | 条件         | 過去2年間のうち連続2回まで。                         |
| 採択件数       | 10件程度                                                                           | 採択件数       | 4件程度                                    |

#### 4 ボラサポの実施状況

##### (1) 制度設立の背景

2016年10月にCECの前身であるボランティアセンターが開設した当初、センターが独自に実施する事業は少なく、2011年の東日本大震災発生直後に発足した大学公認学生ボランティア団体「ボランティア・ステーション」の学生たちを中心に、学生が企画するボランティアプログラムを支援するのが主な役割であった。センターが掲げるミッションのもと、既存の学生団体との関係性に留まらず、より広くの学生や教職員にボランティア活動への参加機会を提供し、学内のボランティア活動の可視化と学内外の組織・人材との連携、そして広くセンターの存在を知ってもらうことを目的に、青山学院大学の学生と教職員すべてを対象にした助成制度として、ボラサポ制度の開発が検討され、2017年4月から運営が始まった。

## (2) 2017 ～ 2018 年度

制度運用の初年度となる 2017 年には第 1 期（前期）に 8 件、第 2 期（後期）に 4 件、合わせて 12 件のプロジェクトから申請があり、そのうち 7 件のプロジェクトを採択した。採択されたプロジェクトの多くは震災・復興支援に関連した活動であり、そのほか国際支援や地域での清掃活動などジャンルは多様であった。また、申請は学生団体の他、体育会や教職員による企画もあり申請者の属性も様々で、審査においても制度運用のスタート期として多様なボランティアプロジェクトを採択する結果となり、学生に留まらない幅広い活動のサポートへと繋がった。2017 年 11 月に開催された青山学院大学ボランティアセンター開設 1 周年記念シンポジウムでは、3 つの採択プロジェクトから活動報告が行われた。2018 年には第 1 期、第 2 期合わせて 8 件の申請、7 件のプロジェクトを採択。2017 年同様に災害・復興支援や国際支援の活動が多く採択され、そのなかでも動物保護といった啓発活動を主としたプロジェクトはスタートアップとしての発展の期待を込めて採択された。

2017 ～ 2018 年度の 1 期・2 期合わせて 4 回実施するなかで、課題も浮かび上がってきた。プロジェクトの審査において、活動実績を十分に積んできた団体が作成する申請書の企画内容と、これから活動をスタートさせる団体が作成する申請書の企画内容では、その企画の具体性に大きな差が生まれてしまい、採択の基準をどのレベルに合わせるかといった審査上の困難さが生じた。多くの学生にとっては、助成金の申請経験はなく、企画書の作成も初めてというなかで、企画書作成は心理的ハードルが高く、新しくプロジェクトを立ち上げたばかりのプロジェクトには制度の申請自体が難しく、制度利用者の幅が限定的になることが懸念された。そこで、既存の活動や実績がなくても、想いと仲間が集まれば活動を実現できることを応援するための制度とすべく、制度運用の見直しが行われた。

## (3) 2019 年～ 2020 年度

2019 年からは、より制度利用の幅を広げるため、プロジェクトの立ち上げを応援するためのスタートアップコースと、これまでの取り組みをより発展させることを応援するためのステップアップコースの 2 つによる目的別コースを創設した。同時に、申請期間中に制度申請のポイント伝えるための制度説明会・ワークショップを開催し、過去に採択経験のあるプロジェクトの学生から、制度活用のメリットや申請書作成のポイントを伝えてもらい、より多くのプロジェクト申請につながる取り組みを行った。

スタートアップコースにおいては、2019 年第 1 期に 3 件のプロジェクトから申請があり、2 件を採択した。採択されたプロジェクトの一つ「世界のダイヤモンド問題を考えよう～映画『ダイヤモンドの来た道』～」は、正課の授業での学びから、身近にあるファッションや愛の象徴であるダイヤモンドが作られる背景に犠牲となっている問題があることを知ったことをきっかけに有志メンバーが立ち上げたプロジェクトであり、審査においても正課の学びによる関心から仲間を集め、社会課題に対して挑戦するその意欲がスタートアップコースの趣旨に沿うものとして評価され、コーディネーターが伴走を行うことで、外部ゲストの招致や学内での映画上映会の開催を実現させた。ステップアップコースでは、海外での国際支援活動と東北での復興支援活動を行う 3 件のプロジェクトが採択され、各コースの趣旨に沿った活動が実施された。しかし、年度後期に募集を行った第 2 期は申請件数が 0 件と申請者が集まらず、学内での広報等、制度の周知に課題が残る結果となった。加えて、2019 年度末には新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、大学内での授業ならびに課外活動に制限が生じたことにより 2020 年度内のボラサポの実施は断念した。

## (4) 2021 ～ 2022 年度

2021 年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響のもと、飲食を伴うイベントや宿泊を伴う活動は対象外とする制限が生じたがボラサポの募集は実施した。2021 年度は両コース合わせて 11 件と最多の申請があり、スタートアップコースが 9 件、ステップアップコースが 2 件である。両コースの申請数の差から、コロナ禍の自粛や制限下で何か新しいことに挑戦したいという想いを持つ多くの学生が新たなプロジェクトを生み出した一方で、もともと活動を継続してきたプロジェクトは活動することが叶わず、申請に結びつかなかったと推察する。プロジェクトは、子どもの支援や女性のキャリア、生理をテーマとした活動など、SDGs の流行に伴い、アドボカシー活動に関連した内容が多いことも特徴的といえる。また、活動方法の点でも、オンラインツールを駆使したイベントや、SNS を積極的に活用した啓発活動が展開したことはコロナ禍ゆえに発展した活動形態である。これまで国際支援や震災・復興支援の活動が申請

の殆どを占めていたため、センターとのつながりや制度利用者の幅が広がった年であるといえる。

2022年度は8件のプロジェクトから申請があり、スタートアップコース2件、ステップアップコース3件の、合わせて5件を採択し、いずれのプロジェクトも対面での活動に取り組んだ。コロナ禍以前に採択されていた東北での復興支援プロジェクトも再度採択され、現地での活動を再開することができた。2023年3月には、CEC主催の青山学院大学学生ボランティアフォーラムを開催し、スタートアップコースとステップアップコースそれぞれの採択プロジェクトメンバーから活動の報告がされた。

2021、2022年度の審査においては、数として多くの申請があったものの、プロジェクト実施にあたっての目標設定や活動内容が十分に検討されていないものも散見し、採択率としては低くなっている。

#### (5) 2023年度

2023年度は各コースの審査や採択方法の大幅な見直しを行った。スタートアップコースは、これまで年に一度の申請受付としてきたが、年度内(4月から翌年1月末まで)であればいつでも申請を可能とした。また、これまでは3人以上のグループであることが条件であったが、個人からの申請も対象とし、申請書の提出とCECコーディネーターによる面談をもとに採択審議を行うことで、申請から採択までの流れを簡略化した。これにより、プロジェクトを立ち上げたいと思ったタイミングで、スムーズにサポートを行うことが可能な運用となった。また、ステップアップコースは、それまで申請書のみでの審査で採択を審議していたが、申請書のみでは読み取れないプロジェクトの意図や確認事項も多いことや、ボラサポの利用を通じてプロジェクトメンバーとCECとの連携、つながりをより増やしていくことを目的にプレゼン審査を取り入れた。2023年度はスタートアップコースの申請が3件、ステップアップコースは2件であり、いずれのプロジェクトも採択している。また、ステップアップコースに採択されたプロジェクトの一つは、2022年度にスタートアップコースに採択された団体であり、スタートアップでの活動経験から団体としての基盤を整え、ステップアップの挑戦へとつながったプロジェクトである。

#### (6) 採択プロジェクトの傾向

2017年から制度を開始したボラサポであるが、これまでの運用からその制度の形も柔軟に変化を重ね、これまで52件の申請のうち36件のプロジェクトが採択されてきた。(資料「ボラサポ制度採択プロジェクト一覧」参照)

採択プロジェクトの傾向や構成メンバーに着目すると、海外での活動を伴うプロジェクトには、グローバルな実践に重点をおく地球社会共生学部の学生が多く、本制度を活用することで自己実現や社会課題解決への挑戦を実現させている。また、動物保護やジェンダー、エシカル消費など、社会や青学生への啓発活動を行うプロジェクトには国際政治経済学部の学生の割合が高い。そのほか、こどもの支援や教育に関するプロジェクトには教育学部の学生が多く、プロジェクトのテーマに応じた学部の傾向がうかがえる。

教職員が主として実施したプロジェクトは全体として少ないが、2022年採択の「古着回収プロジェクト」においては、相模原キャンパス事務部学務課の職員が主導となり、教員や学生、職員が学部として一同で取り組んだプロジェクトとして特筆したい<sup>(10)</sup>。

### 5 採択プロジェクトの内容と成果

本節では、ボラサポの採択を受け活動を行ったプロジェクトのうち特徴的な活動を紹介する。制度を利用したことでの活動の発展、その後の展開について触れる。

#### (1) ペットボトル灯籠プロジェクト(採択:2019年度ステップアップコース)

本プロジェクトは、学生団体Youth for Ofunatoが岩手県南部の大船渡市三陸町越喜来地区で毎年開催される三陸港まつりの開催支援を中心とした活動であり、ボラサポの採択が最も多いプロジェクトである。団体としては、2011年の東日本大震災発災後に認定NPO法人チャイルド・ファンド・ジャパンが大船渡市で展開した支援活動に青学生が参加したことを契機として、同年10月に学生団体を立ち上げ、「大船渡と私たちの未来のために」をビジョンに掲げ、大船渡市越喜来地区の住民との関係を構築し、地域コミュニティの課題や地域活性化を目指して活動を10年以上継続している。ボラサポのプロジェ

クト採択は制度開始初年度の2017年から始まり、震災によって加速した少子高齢化と人口減少に伴う祭りの担い手不足の課題に取り組むべく、三陸港まつりに地域住民が主体的に参加できる機会の創出として、ペットボトル灯籠を活用し住民参加型のイベントを企画することで祭り全体を盛り上げる活動を行ってきた。プロジェクトとしては、ペットボトル灯籠の作成を主軸としながら、地元の中학생や高校生を企画運営に巻き込むことで、世代間継承や多世代交流による地域の活性化に取組み、まつりの担い手の増加や地域の繋がり強化を目指している。また、近年は中學生への学習支援や剣舞・獅子舞などの文化継承に取り組んでいる。(図2)

同プロジェクトは夏と冬または春に開催するイベントの派遣に加えて、複数回の事前派遣も毎年行っており、それらを合わせると総額100万円を超える活動である。学生団体としての資金繰りは常に課題となっており、その点においてボラサポ制度の資金援助としての役割は強いといえる。ボラサポのステップアップコースは上限30万円までの補助であるためそれ単体でプロジェクトの総額を賄うことはできないが、同団体はボラサポ以外の外部助成金にも積極的に応募し、資金確保に取り組んでいる<sup>(11)</sup>。しかし、継続して採択が受けられる助成金も限られており、ボラサポも採択限度回数には限度が定められているため、回数制限の撤廃に対する要望も挙がっている。資金援助以外の側面としては、同団体が本学の公認団体ではなく、任意団体として活動を行っているため、ボラサポへの採択を得ることが大学の公認を受けた活動である証明になり、連携団体や社会的信用を得る意味でも制度もたらず役割があるといえる。

図2：2019年度ペットボトル灯籠プロジェクト 中學生と作成したメッセージパネル



出典：青山学院大学シビックエンゲージメントセンターボラサポ2019年度第1期結果  
[https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/1st2019\\_result/](https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/1st2019_result/)

## (2) Tetote ～みんなで「生理」と向き合おう～（採択：2021年度スタートアップコース）

本プロジェクトは2021年度にスタートアップコースで採択されたプロジェクトで、学生団体Tetoteの有志メンバーによる活動である。同年12月～翌年1月にかけて本学17号館の男子・女子・多目的トイレに生理用品の無料設置ならびに生理の理解に関するポスターの掲示やSNSを活用した啓発活動を行った。生理用品の設置期間中、プロジェクトメンバーが毎日交代で生理用品の消費量の確認と補充を行い、青学生を対象としたGoogleフォームを用いたアンケートを実施し、プロジェクトへの意見・感想、生理用品を学内トイレに設置することの賛否を問うた。また、本学保健管理センターとの共催で青学生に向けたオンラインイベント「Tetote × 保健管理センター～みんなで『生理』と向き合おう～オンラインイベント」を開催している。生理用品は約1ヵ月半の実施期間のうち、4000個近くが消費され、アンケート結果から、学内に生理用品を設置することの是非に関して9割から賛成の回答(n=178)が得られた。「生理用品が手元になく困っていたので助かった」というコメントもあり、緊急的な支援の役割も果たすことができた。また、男性トイレに生理用品を設置したことに対する反応には、「自らは使用しないがパー

トナーと生理について話すきっかけとなった」というコメントがあり、「生理の有無にかかわらず誰もが生理の理解を深め、生理の話題をタブー視しない環境を作っていく」というプロジェクトの目標にもつながる反応を得ることができた。(図3)

同プロジェクトはボラサポの活動期間終了後、2022年5月にプロジェクトを通して得たアンケート結果をもとに学内で報告会を開催した。プロジェクトの上位目標でもあった「学内トイレの生理用品常設」を求めるため、その必要性や学生たちの想いやニーズを教職員や外部に向けて発信し、その様子はメディアにも取り上げられた<sup>(12)</sup>。

図3：トイレに設置する生理用品を補充するプロジェクトメンバーの様子



出典：青山学院大学シビックエンゲージメントセンターボラサポ 2021年度ボラサポ採択結果・プロジェクト報告  
[https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/2021\\_result/](https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/2021_result/)

本プロジェクトにおけるボラサポの活用がもたらす効果として、まず学内の施設利用許可の補助が大きい。学内トイレに生理用品を設置することは学内での施設利用許可を得ることであり、学生のみで許可を得るハードルは高い。ボラサポに採択され、センターによる公認を受けて実施することが活動の前提条件にもなっていた。また、学生が閲覧するポータルサイト上へのアンケート調査掲載など、学内周知の協力も役割として効果的であった。また、本学保健管理センターとのイベント共催は、プロジェクトを伴走したコーディネーターによる学内での情報共有がきっかけであり、学生への周知に限らず、学内部署や他センターを横断した連携ができたことも活動の幅の広がりにつながったといえる。

### (3) しぶっこ主催のこどもテーブル「しぶテ」(採択：2021年度ステップアップコース)

しぶっこは、渋谷区こどもテーブル事業<sup>(13)</sup>に参加した学生ボランティアの有志が集い2020年に結成された学生団体である。こどもテーブルを軸に地域交流を促す主体となり、情報・魅力を発信することを団体のミッションに掲げ、こどもテーブル活動へのボランティア参加や取材を行い、団体SNSでこどもテーブルに関連した記事やスライドを作成し、こどもテーブル団体の活動紹介や参加レポートの発信を行う。それまでのしぶっこの活動は、SNSによる情報発信が活動のメインであるが、団体メンバーが増えたことをきっかけに団体としての活動の幅を広げるため、ステップアップコースへの挑戦を行った。プロジェクトの内容は、これまでに活動に参加し関係性を構築したこどもテーブル団体と連携する形で、ねりきり作りとキャンドル作りの活動を2日間行った。コロナウイルスの感染拡大防止のため、やむなくオンライン開催となったが、参加する小学生たちを飽きさせないための工夫や雰囲気づくりを学生視点で行っている。(図4)

これまでボランティアとしてこどもテーブルに参加する側であったしぶっこが、こどもテーブルの魅力を発信するという団体の理念はそのままに、自分たちが主催のプロジェクトに挑戦し、子どもたちや団体同士のつながりを狙った活動を行ったことは、ボラサポの趣旨に適ったものであり、団体としてのステップアップにつながるプロジェクトであったと受け止める。

図4：Instagramでオンラインイベント開催の様子を発信



出典：青山学院大学シビックエンゲージメントセンターボラサポ 2021 年度ボラサポ採択結果・プロジェクト報告  
[https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/2021\\_result/](https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/2021_result/)

#### (4) タイ北部山岳地域オーガニック・コーヒー農家支援プロジェクト（採択：2018 年度）

本プロジェクトは、タイへの学部留学を経験した地球社会共生学部の学生が中心となって実施したプロジェクトである。留学中にタイ北部チェンラーイ県にて山岳少数民族の支援団体「ルンア ルン・プロジェクト」の中野穂積氏（本学の卒業生）に出会い、彼女の活動と、この土地の人々が丹精込めて栽培している有機コーヒーに感銘を受けたことがきっかけとなり、このコーヒーを通じて山岳少数民族の暮らしや、現地の魅力を日本の若い世代へ伝え広めていくことを目的としたプロジェクトが立ち上がった。実施内容としては、夏期休業期間を利用してプロジェクトメンバー全員が現地調査に赴き、コーヒー生産者の文化や生活状況について理解を深めた後、相模原県にて、現地から仕入れたタイ北部産のコーヒーの提供資料の展示を行った。また、青山学院高等部にて開催された Global Week II にて「コーヒーを通じた国際協力～東ティモール VS タイコーヒーで村おこしディスカッション～」と題した企画が実施され、高等部の生徒自主学习団体「BLUEPECO」と共に登壇し、それぞれの活動報告と、お互いのフィールドから見えてくる国際協力の在り方について活発な議論がなされた。本プロジェクトの主な成果としては、これらの実践を通して、幅広い世代へタイ北部産のオーガニック・コーヒーの魅力や、山岳少数民族の暮らしとその文化的背景について伝えることができたことである。また、センター事業としては、本学の卒業生とつながりを持ちながらプロジェクトが進められたことや、大学（ボランティアセンター）と高等部が連携して企画が実現されたことから、ボラサポ制度を通じて本学のネットワークが強化される可能性が示唆された。なお、翌年の 2019 年度においても、同地域をフィールドとし、同支援団体を協力団体としたプロジェクトが新たなメンバーのもとで申請され、採択されている。

#### 6 制度の課題・今後の見通し

これまで制度の概要と変遷を整理し、ボラサポを活用した特徴的なプロジェクトについて報告してきた。本節では、これまでの採択団体の傾向から現在のボラサポにおける制度の課題を整理し今後の見通

しについてまとめる。

### (1) 申請数の停滞

ボラサポの申請数は年によりバラツキはあるが、最も申請数が多かった年は2021年の11件で、2019年・2022年は8件の申請、2023年には5件と減少している。特にステップアップコースは2021年と2023年が2件の申請に留まっており、制度としての採択予定件数を割っている状況である。より多くのプロジェクトをサポートし、活動を促進させていくためには、制度の存在や活動内容を多くの学生や教職員に周知することが重要課題としてある。特にスタートアップコースの対象となる新規のプロジェクトや興味を持つ学生を増やすためには、普段からセンターが主催するイベントや活動に参加する学生へ制度を紹介していくことが効果的と考える。

また、申請書作成による申請ハードルの高さもあるといえる。NPO 法人アクションポート横浜が実施する「横浜アクションアワード」は、書類審査とオンライン審査、プレゼンテーション審査の3つの審査で構成されているが、書類審査の対象となるエントリーシート自体がPowerPoint形式のプレゼン仕様となっており、視覚的にも企画が整理しやすい構成かつ、その後の審査にも活用されていくため、学生にとっても負担に感じにくい工夫がされている。申請書の内容を簡素化することは教育的観点からも慎重に行うべきであるが、学生がプロジェクトの目的や課題をクリアにし、整理しやすくする工夫は検討の余地がある。そのほか取組めることとしては、ボラサポに限らず外部助成金への申請も視野にいれた助成金申請と活用のための研修機会を設けることなども考えられる。

### (2) 活動範囲の拡大と管理の難しさ

制度創設当初、その申請の多くは復興支援や国際支援に関連したプロジェクトであったが、利用するプロジェクトの増加により、その活動範囲やジャンルの多様化が進んでいる。これに伴い活動の管理や審査の難しさも増しており、柔軟な制度運営が求められている。日本財団ボランティアセンター（当時は日本財団学生ボランティアセンター）が明治学院大学とのパートナーシップを結んで実施した「Gakuvo Style Fund<sup>(14)</sup>」は2019年にその助成事業を終了した。事業終了の明確な理由は不明だが、支援する立場から見た課題として波多野（2019:35）は、「制度に対する支援する側とされる側の意識の乖離」があったことを指摘している。支援側は助成金を活用することでの学生の成長を望むが、支援される側は当面の活動が成功裡に終われば良いという認識が、特に常連団体に顕著にあり、「活動自体は安定しているものの、結果として3回目、4回目の申請で成長が見込めない団体よりも荒削りでも成長の期待が持てる団体に援助する結果となって現われた。」と述べているように、制度の趣旨に沿った採択のバランスを管理する難しさがある。

また、惜しくも採択から漏れてしまい不採択となったプロジェクトに対するフォローやサポートも重要な課題といえる。プロジェクトを計画し、申請書を作成・完成させ、ようやく申請まで漕ぎつけたプロジェクトに対して、不採択通知のみで繋がりが途切れてしまうことは、CECとしてのつながり・連携の幅を狭めることでもあるため、金銭的補助は行わないまでも、一部の事務的サポートや、企画をブラッシュアップするための場の設定、制度外の助成金や連携団体の紹介など、何らかの支援を行えることが望ましい。

### (3) 市民協働を推進する制度としての仕組みづくり

現状、ボラサポの運用にかかわるのはCEC関係者と申請者のみであり、学内に限定されていることも課題といえる。CECが2022年にボランティアセンターから改組し、これまでのボランティア活動支援に加え、市民協働活動の強化に取り組んでいくうえで、ボラサポも制度として市民協働を促進するための仕組みづくりを検討していく必要がある。例えば、学内外へ向けた報告会を設定することも一つである。また、聖学院大学が実施する「ボランティア・まちづくり助成事業<sup>(15)</sup>」のような、審査段階で地域の小中学校や地域住民を巻き込んだ地域参加型助成制度とすることも、広くボラサポやプロジェクトの取組みが認知され、学生にとっては連携先や支援先を増やす機会となり、大学にとっては地域連携の機会創出となる。このような市民協働活動を推進するための仕組みづくりも今後検討の余地があるといえる。

## 7 おわりに

これまでボラサポの概要や制度の変遷を整理し、特徴的なプロジェクトについて触れた。ボラサポは本学の学生・教職員が主体となって取り組むプロジェクトを対象とした助成制度であり、その役割は資金援助のみならず、アドバイザー活動、マッチング活動、資源提供活動、広報活動、基盤強化等の機能を備えている。申請書を作成していく過程での課題分析や目標の可視化を行い、第三者へ伝わる企画書づくりを行うことや、大学として認めたプロジェクトとして活動先に対する信頼感を得て活動を行えること、資金援助やコーディネーター伴走のもとで活動後の発展を見据えたプロジェクトを実施していくことは、制度を利用した学生にとっての成長の機会として果たす役割も大きい。

本論では、制度を利用することでの学生の学習的貢献度を指標として示すことは困難であり今後の課題とする必要がある。2022年度採択の「共生社会実現へのメイクアッププロジェクト」では、メイクを得意とする青学生が、障がいのある人とオシャレを楽しむ活動に取り組み、当時4年生の代表学生はその後就職先として障がい福祉サービスをメイン事業とする企業に就職を果たした。このように学生がプロジェクトに取り組むことでその後の進路への影響や就職活動における貢献等も一つの定性的指標として着目していきたい。

制度としての課題は未だ多いが、これまでも制度運用のなかで課題を常に検討し、活用しやすい制度となるよう修正を行ってきた経緯もある。2023年度は前節で述べたとおり、各コースの申請期間や審査方法を大きく変えて実施しており、その成果については今後検証していく必要がある。制度の中身を修正していくだけでなく、目的に応じて、ボラサポとは異なる新たな補助制度を創設していくことも求められよう。

2017年から2023年までの7年間で、多種多様なプロジェクトがボラサポを活用して発展してきたように、ボラサポもまた、より青学生・教職員にとって利用しやすく、活動の幅が広がるための教育的側面と社会貢献に資する制度としていくことを今後の検討課題としていきたい。

## 注

- (1) シビックエンゲージメントセンターが掲げるミッションには、「学生・教職員の自発的な社会貢献活動への参画を促進すること」「大学の持つ専門性や強みを活用してボランティア活動や市民協働活動の社会的効果を向上すること」「社会貢献活動への参加にともなう教育的効果を向上させること」の3つがある。
- (2) 2023年度時点 CEC ではボラサポの他、青学生を対象とした災害および復興支援ボランティアの旅費を補助することを目的とした「災害・復興支援活動に対するサポート制度」と、教職員の自発的な社会活動への参加を促進するための「教職員ボランティア活動補助プログラム」がある。
- (3) 大学ボランティアセンターとは、大学内に設置される中間支援機能を持った部署であり、主に地域からのボランティアニーズの集約とボランティア活動を希望する学生とのマッチング機能を有している。名称はボランティアセンターに限らず、ボランティア情報室、ボランティアステーション、サービスラーニングセンター等多様な名称がある。
- (4) 調査では、ボランティア活動を専門に担当する部署がある」は約2割(127大学)、「他業務とともに、ボランティア活動を担当する部署がある。(学生部、教務部、宗教部等)」は6割(379大学)の結果となっている。
- (5) 同調査における13の支援項目は、1情報収集提供活動、2アドバイザー活動、3マッチング活動、4学習支援活動、5プログラム開発・運営活動、6資源提供活動、7調査研究活動、8広報・認知度アップ活動、9ネットワークワーキング活動、10一般啓発活動、11基盤強化活動、12授業支援活動、13災害支援活動、14その他に分類されている。
- (6) 資源提供活動の項目は、ミーティングスペースや作業スペースなどの「場所」の提供と、センター内パソコン、図書、文房具などの「もの」、学内助成金、学外助成金、ボランティア保険の保険料助成の「お金」の主に3つに分類されている。
- (7) 面談は CEC コーディネーター1～2名程度で実施し、企画の概要や活動計画を聞き取る。その後、CEC コーディネーター、センター長、副センター長、所管事務内で採択協議を行い、CEC 実務委員会にて採択・不採択が承認される。審査期間は申請から採択通知まで3～4週間程であり、採択・不採択にかかわらず、評価

に関するアドバイスを申請者には行う。

- (8) 審査委員は年度により増減はあるが、CEC 実務委員会より5～7名程度で構成され、申請から採否通知まで約1か月の間で行われる。採否の結果にかかわらず、結果の理由を伝え、今後の活動に活かしていくことや、経費支援を必要としない活動にはアドバイスをを行うことを通知している。
- (9) これら審査項目は募集要項に記載されており、申請者は企画段階でそれら項目を意識したプロジェクト立案を行うことができるかが評価のポイントでもなる。
- (10) 青山学院大学 HP. 「【地球社会共生学部】 タイ北部の山地民の方々に衣服をお届けすることができました！」  
参照先 : [https://www.aoyama.ac.jp/faculty112/2023/news\\_20240117](https://www.aoyama.ac.jp/faculty112/2023/news_20240117) (2024.1.17)
- (11) 同団体はボラサポの他、一般財団法人学生サポートセンターの学生ボランティア団体助成事業の採択(2021年度) 全国被災地こども支援 3.11 基金の採択(2022年度) など、外部助成金に積極的に獲得、活用している。
- (12) 東京新聞. (2022年7月23日). 男性のトイレ優しく発展中「困らず使えることは人権を守ること」. 参照先 : <https://www.tokyo-np.co.jp/article/191358>
- (13) 渋谷区こどもテーブル事業は渋谷区社会福祉協議会が運営する事業であり、渋谷区版ども食堂として、「身近な地域でつながり支えあふ基盤づくり」を活動理念に渋谷区内各地で活動が広がっている。2023年5月時点で子ども食堂団体は64団体、居場所づくり・学習支援団体は50団体と、100以上の団体となっている。
- (14) 日本財団学生ボランティアセンター(現: 日本財団ボランティアセンター) が2014年に創設した全国規模の学生を対象とした助成事業。5年間で全209団体を支援しており、本学にも採択を受けた学生ボランティア団体がいる。
- (15) 聖学院大学では、「ボランティア・まちづくり活動助成事業」として、学生が取り組むボランティア活動の応援や活性化を目的に、同窓会と共催による公開審査会・ドネーションパーティーをおこなっている。それには同大学所在の上尾市内の小中学生が審査員として関わっている。

## 引用文献・参考文献

Youth for Ofunato. (2024年2月). Youth for Ofunato 公式サイト.

参照先 : <https://youthforofunato311.jimdofree.com/>

青山学院大学シビックエンゲージメントセンター. (2022年3月). 「2022年度学生ボランティア・フォーラム開催報告」.

参照先 : <https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/20230303/>

青山学院大学シビックエンゲージメントセンター. (2023). 「シビックエンゲージメント研究第1号」, 70.

青山学院大学ボランティアセンター. (2017年11月18日). 青山学院大学ボランティアセンター開設1周年を迎えて  
～” 経験” ×” 繋がり” で更なる「発展」を!～.

参照先 : <https://www.aoyama.ac.jp/info/event/2017/02355>

国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター. (2020). 「大学生のボランティア活動等に関する調査報告書」, 20.

佐藤亜希. (2023). 「コロナ禍における学生のボランティア活動動機の変化 - ボランティア活動に関するアンケートから -」.  
『青山学院大学シビックエンゲージメント研究第1号』, 32-33.

聖学院大学地域連携・教育センター. (2021). 「聖学院大学大学地域連携事業報告」, 10-11.

東京ボランティア・市民活動センター. (2021). 大学ボランティアに関する全国実態調査報告書, 7

日本財団学生ボランティアセンター. 2017, 「全国学生1万人アンケート～ボランティアに関する意識調査 2017～」

波多野洋行. (2019). 「明治学院大学ボランティアセンター報告書第16号」, 35.

資料

ボラサポ制度採択プロジェクト一覧

| 年度・件数                               | プロジェクト名                                 | キーワード               | 構成メンバー                                            |
|-------------------------------------|-----------------------------------------|---------------------|---------------------------------------------------|
| 2017 年 第 1 期<br>申請数：8 件<br>採択件数：4 件 | 三陸港まつり開催支援「ペットボトル灯籠」の作成を通じた地域住民の参加機会の創出 | 復興支援、学生団体、国内遠方      | 学生 9 名（国政経 8、国政経研究科 2）<br>一般 1 名（他大学）<br>卒業生 1 名  |
|                                     | 体育会レスリング部 大島クリーンプロジェクト                  | 清掃活動、部活動            | 学生 24 名（経済 11、経営 7、総文 3、社情 2）<br>職員 3 名           |
|                                     | Samaritans Place 支援プログラム                | 国際支援、遠方             | 学生 4 名（教育 3、国政経 1）<br>一般 2 名                      |
|                                     | 韓国スタディツアー                               | 文化交流、海外、遠方          | 学生 17 名（地球 17）                                    |
| 実施サポート 2 件                          | 飯館村写真展とギャラリートーク                         | 復興支援、職員企画           | 職員 3 名<br>教員 1 名（教育）                              |
|                                     | 相模原キャンパス周辺地区での清掃活動 + a                  | 清掃活動、職員企画           | 職員 3 名                                            |
| 2017 年 第 2 期<br>申請数：4 件<br>採択件数：3 件 | Table For Two 寄付金付きドライブルーツ販売            | 国際支援、復興支援、学生団体      | 学生 13 名（総文 5、文 3、経営 2、教育 1、法 1、国政経 1）<br>卒業生 1 名  |
|                                     | 猪苗代応援スタディーツアー                           | 復興支援、国内遠方           | 学生 10 名（文 9、教育 1）<br>教員 1 名（講師）                   |
|                                     | 大船渡地域活性化プロジェクト                          | 復興支援、学生団体、国内遠方      | 学生 10 名（国政経 8、国政経研究科 2）<br>一般 1 名（他大学）<br>卒業生 1 名 |
| 2018 年 第 1 期<br>申請数：4 件<br>採択件数：3 件 | タイ北部山岳地域オーガニック・コーヒー農家支援プロジェクト           | 国際支援、国外活動           | 学生 3 名（地球 3）<br>教員 2 名（地球 2）                      |
|                                     | 相馬市海浜地域学習支援プロジェクト                       | 正課発展、復興支援、国内遠方、教員企画 | 教員 1 名（教育）<br>学生 15 名（教育 15）<br>職員 1 名            |
|                                     | 相模原自然教室プロジェクト                           | 自然体験、こども支援          | 学生 16 名（地球 16）                                    |
| 2018 年 第 2 期<br>申請数：4 件<br>採択件数：4 件 | Samaritans Place 交流プログラム                | 国際支援、海外             | 学生 7 名（教育 5、国政経 2）                                |
|                                     | フィリピン食育&衛生知識プロジェクト                      | 国際支援、海外             | 学生 18 名（地球 18）                                    |
|                                     | 猪苗代魅力発信スタディーツアー                         | 正課発展、復興支援、国内遠方      | 学生 6 名（教育 6）<br>教員 1 名（講師）<br>一般 1 名              |
|                                     | 動物保護、啓発活動                               | 啓発活動、動物保護、団体立ち上げ    | 学生 6 名（国政経 6）                                     |

|                                                                                                         |                                      |                                   |                                                                 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------------------------------------|
| 2019 年 第1 期<br><br>応募総数：8 件<br>スタートアップ：3 件<br>ステップアップ：5 件<br><br>採択件数：5 件<br>スタートアップ：2 件<br>ステップアップ：3 件 | 世界のダイヤモンド問題を考えよう<br>～映画『ダイヤモンドの来た道』～ | スタートアップ、エシカル消費、映画上映、啓発活動          | 学生 3 名（文 3）                                                     |
|                                                                                                         | ～顔と顔が見えるつながり～タイ北部オーガニックコーヒープロジェクト    | スタートアップ、正課発展、国際支援、海外              | 学生 3 名（地球 3）<br>教員 1 名（地球）                                      |
|                                                                                                         | 相馬市立中村第二中学校での夏休み学習支援プロジェクト           | ステップアップ、正課発展、復興支援、国内遠方            | 学生 9 名（教育 9）<br>一般 5 名（他大学 5）                                   |
|                                                                                                         | ペットボトル灯籠プロジェクト                       | ステップアップ、復興支援、学生団体、国内遠方            | 学生 12 名（国政経 8、国政経研究科 2、法 1、経済研究科 1）<br>一般 2 名（他大学 2）<br>卒業生 1 名 |
|                                                                                                         | 子どもの意識改革プロジェクト                       | ステップアップ、国際支援、学生団体、国外活動            | 学生 12 名（地球 10、理工 1、コミュ 1）                                       |
| 2019 年第 2 期                                                                                             | 申請プロジェクトなし                           |                                   |                                                                 |
| 2020 年                                                                                                  | 新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、実施なし。            |                                   |                                                                 |
| 2021 年<br>申請数：11 件<br>スタートアップ：9 件<br>ステップアップ：2 件<br><br>採択件数：5 件<br>スタートアップ：4 件<br>ステップアップ：1 件          | 渋谷区×女性議員×青学～キャリアの選択肢を広げよう～           | スタートアップ、トークイベント、ジェンダー平等、オンラインイベント | 学生 8 名（国政経 4、教育 2、総文 1、文 1）                                     |
|                                                                                                         | 子供の居場所作りプロジェクト                       | スタートアップ、こども支援、学生団体                | 学生 5 名（地球 1、コミュ 1）                                              |
|                                                                                                         | Free&Smile ～生理期間をもっと自由にもっと笑顔で～       | スタートアップ、ジェンダー平等、啓発活動              | 学生 3 名（地球 2、コミュ 1）                                              |
|                                                                                                         | Tetote ～みんなで「生理」と向き合おう～              | スタートアップ、ジェンダー平等、啓発活動、学生団体         | 学生 9 名（文 3、経営 2、国政経 2、法 1、教育 1）<br>教員 1 名（法）                    |
|                                                                                                         | しぶっこ主催のこどもテーブル「しぶテ」                  | ステップアップ、こども支援、学生団体、オンライン          | 29 名（教育 8、文 6、法 6、国政経 4、総文 3、地球 1、コミュ 1）                        |

|                                                                                                                               |                                          |                         |                                            |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------|-------------------------|--------------------------------------------|
| <p>2022 年<br/>申請数：8 件<br/>スタートアップ：<br/>4 件<br/>ステップアップ：<br/>4 件</p> <p>採択件数：5 件<br/>スタートアップ：<br/>2 件<br/>ステップアップ：<br/>3 件</p> | 共生社会実現へのメイクアッププロジェクト                     | スタートアップ、障がい者支援、学生団体     | 学生 3 名（法 2、文 1）<br>一般 2 名（他大学 2）           |
|                                                                                                                               | あらとう～innovation around 20～<br>スタートダッシュ企画 | スタートアップ、エシカル消費、学生団体     | 学生 4 名（国政経 2、経営 1、教育 1）                    |
|                                                                                                                               | Let's Open New Doors!                    | ステップアップ、こども支援、社会体験、学生団体 | 学生 7 名（教育 3、コミュ 3、文 1）                     |
|                                                                                                                               | 古着回収プロジェクト「北タイに幸<br>服を届けたい」              | ステップアップ、国際支援、寄付、職員企画    | 学生 15 名（地球 15）<br>職員 8 名<br>教員 1 名（地球）     |
|                                                                                                                               | ペットボトル灯籠プロジェクト「未<br>来を灯そう～越喜来 2023～」     | ステップアップ、復興支援、学生団体、国内遠方  | 学生 6 名（法 5、交換留学生 1）<br>一般 2 名（他大学 1、一般 1）  |
| <p>2023 年<br/>申請数：5 件<br/>スタートアップ：<br/>3 件<br/>ステップアップ：<br/>2 件</p> <p>採択件数：5 件<br/>スタートアップ：<br/>3 件<br/>ステップアップ：<br/>2 件</p> | 脱ビニール使い捨てプロジェクト                          | スタートアップ、啓発活動、環境問題       | 学生 2 名（文 1、総文 1）                           |
|                                                                                                                               | 6 大学連続難民映画祭                              | スタートアップ、難民支援、映画上映       | 学生 6 名（国政経 3、地球 3）                         |
|                                                                                                                               | 青学生と子どもたちの「ゆめどこ」                         | スタートアップ、子ども支援、工作        | 2 名（コミュ 2）                                 |
|                                                                                                                               | ペットボトル灯籠プロジェクト～よ<br>り多くの住民の参加を目指して～      | ステップアップ、復興支援、学生団体、国内遠方  | 学生 5 名（法 3、文 1、教育 1）<br>一般 9 名（他大学 8、一般 1） |
|                                                                                                                               | あらとう青山祭 2023                             | ステップアップ、エシカル消費、学生団体     | 学生 8 名（経営 3、国政経 2、経済 1、教育 1）               |

出典：青山学院大学シビックエンゲージメントセンター HP レポートボラサポをもとに筆者作成  
([https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report\\_category/v-support/](https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report_category/v-support/))